

北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討

——日独関係史の再検討に向けて——

小 原 淳

Comprehensive Research about German-related Historical Sites in Hokkaido: Toward a Rethinking of the History of German-Japanese Relations

Jun OBARA

Abstract

Many historical sites related to German history exist in Japan. I have already identified more than 1,000 that include scenic spots, buildings, museums, archives, collections, and monuments. In this paper, I choose seven German-related historical sites in the Hokkaido area and explain their historical background.

In (1), I give an overview of the activity of Prussia's deputy envoy Maximilian A. S. v. Brandt in the Ezo colony and the land reclamation business of trader Phillip E. Reinhold Gärtner. In (2), I trace the life of landscaper Louis Böhmer, who conducted plant surveys and agricultural guidance. In (3), I introduce businessman Ludwig Harbor, who died by the hands of a former feudal lord, and episodes related to his nephew Fritz Harbor. In (4), I investigate the experiences of the Koch and Grabau families, who cultivated sugar beet, and compare the sugar industry in Germany and Japan between the eighteenth and the twentieth centuries. In (5), I focus on Futaba Kindergarten and discuss German woman Clara Matsuno, who introduced Julius Fröbel's education to Japanese kindergartens, and Fröbel's achievements and thoughts. In (6), I introduce the achievements of Carl Weidl-Raymon, the founder of the ham sausage store, as well as their involvement in pan-Europeanism. In (7), I examine the achievements of Xavera Rehme, who contributed to the founding and development of Fuji Gakuen, and propose that the role of women in the history of German-Japanese relations should be noted.

I. はじめに

初めて日本を訪れたドイツ人は、1614～20年頃に来日したウルム出身のホーライター (Michael Hohreiter 1591-?) とされる⁽¹⁾。以来400年にわたる日独の交流をトピック風に列挙すれば、オランダ東インド会社との交易、洋学の摂取、幕末の国交樹立、居留地での商取引、宣教師たちの伝道、お雇い外国人の貢献、遣欧使節団や留学生の洋行体験、翻訳をつうじた各種の学知の日本への移植、ドイツ人による日本での学術調査、ジャポニズム、三国干渉と黄禍論、第一次世界大戦での交戦、大戦後の捕虜収容、外交面での接近と離反、反ファシズム・反戦運動における協調、1930～40年代の提携関係の構築、ゾルゲ・グループの活動、ユダヤ人亡命者の来日と猶太人対策、第二次世界大戦中の軍事協力、戦争の記憶や「過去の克服」に関する類似と相違、文化人や政財界人の訪日・訪独、草の根レベルでの親善活動、スポーツや文化活動による交歓、文学・絵画・音

(1) Teruaki Takahashi, *Japan und Deutschland im 17. und 18. Jahrhundert unter besonderer Berücksichtigung von Wirkungen des deutschen Japan-Forschers Engelbert Kaempfer. Eine historische Skizze*, in: Hans-Jürgen Lüsebrink (Hg.), *Das Europa der Aufklärung und die außereuropäische koloniale Welt*, Göttingen 2006, S. 211.

楽・映画・アニメ・漫画の作品中に表れた相互イメージ等、多岐にわたるテーマが浮上するが、ここで指摘しておきたいのは、こうした日独関係史の諸側面に関わる史跡・史実が日本各地に相当数散在しているという事実である。筆者は2012～16年に和歌山県内の関連史跡・史実を検討し⁽²⁾、その後、対象を全国規模に拡大して調査活動を続行しているが、2020年5月の時点で確認済みの当該の史跡、景勝地、建造物、博物館・文書館・資料館・記念館等の施設、コレクション、モニュメント等は1000件以上にのぼる⁽³⁾。

それらの史跡・史実のなかには、既に詳細な研究が発表されているものも少なくない。また、日独関係史の諸相を多角的な視点から総合的に提示した書籍・展覧会もある⁽⁴⁾。しかし、「地域」という視点から、日本全体をカバーするかたちで、また政治、経済、社会、文化の各分野を横断して、日独の交流を検討したものは未だない。各都道府県に点在する事例をできる限り多く把握し、国内外の史料、文献の検討も交えつつ検討すること、そして分散した点のごとき諸事例を結び合わせて日独関係史の全体像に迫ろうとする試みは、各地の研究・教育機関や郷土史家による個別研究の成果と、ともすれば「外国史研究」の枠内に収まって、日本の歴史研究や地域研究の動向に鈍感になりがちでドイツ史研究を架橋することに、いくばくか寄与しうるかもしれない。

今後10回程度に分けて、47都道府県に存する日独交流関連の史跡・史実を論じる予定だが、初回に当たる本論文は北海道を対象とし、とくに7つの事例を取り上げる。

本論に入る前に、本研究全体に共通する基本的な方針を示しておく。まず対象の範囲についてであるが、周知のとおり、「ドイツ」の国家領域は歴史上、たびたび大きく変化している。また、その言語的・文化的な広がりには国境線の内部にとどまらない。したがって本研究では、対象を現在のドイツ連邦共和国に属する地域に限定せず、オーストリア、東欧地域、スイス等も、またバルト・ドイツ人、アメリカに渡ったドイツ人移民等も扱う。次に、論述のスタイルについてであるが、筆者の能力のみならず紙幅の都合もあって、存在を確認した史跡・史実のすべてを網羅的に扱うことができないため、各論文では重要なものを一覧表にして掲載し、そのなかでもとくに取り上げるべきと思われるものについて論及する。論及すべきかどうかを判断するに際しては、史跡の保存状態が比較的良好であること、文字史料が一定程度残されており史実を検証可能であること、ドイツ史研究・日本史研究者のあいだで詳細が周知されているとはいいいがたく、今後さらなる検討が必要であること、単なる「奇談」の類ではなく、日独関係史の再考に結びつくような問題を含んでいることといった諸点を基準とした。なお、やはり紙幅の都合から、史料、参考文献への言及は最小限にとどめざるを得ず、とりわけ、ほとんどの項目において執筆の際に参照した都道府県史や市町村史は、必要と思われるものを除いて割愛した。日付は陽暦で表す。

II. 北海道地域に存する史跡・史実

(1) 蝦夷地植民地化計画⁽⁵⁾

1868年1月27日に鳥羽・伏見の戦いが勃発して戊辰戦争が始まると、英米仏蘭普伊の駐日代表は集まって協議し、2月18日に局外中立を宣言した。しかしイギリスは薩長を支援し、当初は幕府を支持したフランスもイギリスとの協調に転じる。対してプロイセン駐日代理公使ブランド（Maximilian A. S. v. Brandt 1835-

(2) 小原淳「カール・ケッペンと和歌山—地域から見直す日独交流史—」（東悦子・藤田和史編『わかやまを学ぶ—紀州地域学初歩の初歩—』清文堂出版、2017年所収）；同「和歌山の景教碑」（村井章介監修、海津一郎・稲生淳編著『世界史とつながる日本史—紀伊半島からの視座—』ミネルヴァ書房、2018年所収）。

(3) 各地に多数建立された日独戦役（第一次世界大戦）の記念碑、詩人・歌人の歌碑、教会、大学等を逐一数えあげると、この数はさらに増える。

(4) 例えば日独交流150周年（2011年）を機に出版・開催されたものとして、Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn-Museen, Verband der Deutsch-Japanischen Gesellschaften (Hg.) *Ferne Gefährten. 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen*, Regensburg 2011；日独交流史編集委員会編『日独交流150年の軌跡』雄松堂書店、2013年；国立歴史民俗博物館・2015年度企画展示「ドイツと日本を結ぶもの—日独修好150年の歴史—」（2015年7月7日～9月6日開催）。また、近年に編まれた大部の論文集として、工藤章、田嶋信雄編『日独関係史』全三巻、東京大学出版会、2008年；同編『戦後日独関係史』東京大学出版会、2014年。

1920) は旧幕府支持の立場をとり、米伊もこれに同調した。プロイセンは開戦前から、領事館書記官のハインリヒ・シュネル (Johann Heinrich Schnell 1843?-1871?) が長岡藩や会津藩と接触して、「平松武兵衛」の日本名で列藩同盟の軍事顧問に就任しており、またその弟でスイス総領事館書記官だったエドワルド (Edward Schnell 1844-?) が新潟にエドワルド・スネル商会を開業して列藩同盟側に武器を提供する等、幕軍側との独自のコネクションを作り上げていた。

おそらく 1868 年 5~7 月のある時点で会津藩と庄内藩はブラントに接触し、両藩が蝦夷地等に有する領地の売却を打診した。1865 年、67 年に蝦夷地を視察したことがあったブラントは、7 月 31 日付の書簡で本国に状況を伝えた。これに呼応するように、プロイセン本国においてもオイレンブルク使節団の東アジア遠征以降、東アジアにおける拠点として台湾や吐噶喇諸島、五島列島等に関心をもつ勢力があった。

前年に北ドイツ連邦を成立させたばかりの首相ビスマルク (Otto E. L. v. Bismarck-Schönhausen 1815-98) は、当初、他国との協調維持を優先し、ローン (Albrecht v. Roon 1803-79) 宛ての 10 月 8 日付の書簡で、蝦夷地買収に否定的見解を示した。ところが、ブラントからの続報 (8 月 21 日に発送) で、英米に琉球や長崎への侵出の可能性ありという情報を得ると、ビスマルクは方針を変え、会津・庄内両藩との交渉開始を指示する。しかし、この時には戦局は決していた。10 月 8 日、維新軍が会津若松城下に突入、11 月 6 日に会津藩、8 日に庄内藩が降伏し、ビスマルクが蝦夷地獲得に関心を示したころには、その可能性は潰えていたのである。

プロイセン・ドイツによる北海道植民地化の話には、「ガルトネル事件」と呼ばれる続きがある。戊辰戦争開戦前、プロイセンの貿易商ゲルトナー (Phillip E. Reinhold Gärtner 1830-?) は、横浜クニッファー商会の箱館代理店店長で駐箱館プロイセン副領事の弟コンラート (Eduard Conrad 1838-83) と協力しつつ、1867 年に箱館奉行の許可を得て、七重村 (現在の七飯町) の 1500 坪の土地の開墾計画を開始した。翌年に幕府が倒れると、ゲルトナーは新政府が設置した箱館府と折衝し、開墾事業に着手した。なお、両兄弟は 65 年と 67 年のブラントの蝦夷地視察に同行している。

1868 年 12 月 4 日に維新軍と幕軍の最後の戦い、箱館戦争が勃発して、ゲルトナーをめぐる状況はさらに変化した。翌年 1 月 27 日、榎本武揚 (1836-1908) がブリュネ (Jules Brunet 1838-1911) からフランス軍事顧問団の力も借りて箱館を占領し、3 月 31 日に独自の蝦夷島政府を樹立すると、ゲルトナーはこの新政権と交渉して「蝦夷地七重村開墾条約書」を締結、事業の継続のみならず、周辺の約 300 万坪の 99 年間の租借権を得た。ところが、蝦夷島政府は明治政府軍の攻撃を受けて、6 月 27 日に降伏する。ゲルトナーは再度の申請を行い、四つ目の交渉相手となった明治新政府から認可を得た。しかし、開墾地の所有をめぐる近隣住民とのあいだに確執が生じ、話し合いの末に 1870 年 11 月、賠償金 6 万 2500 ドルをゲルトナーに支払うことで契約解消となった。本国の 1.5 倍の面積をもつドイツ領南西アフリカの植民地化が周囲 5 マイルの土地の売却から始まったことを思えば⁶⁾、ゲルトナーと蝦夷島政府の契約がそのまま通用した場合、北海道と日本の歴史に及ぼす影響は少なくなかったであろう。

ゲルトナーの農場では西洋式の農具やパン焼き竈が使用され、牧草、小麦、大麦、燕麦、菜種、キャベツ、そしてリングヤやさくらんぼ、梨、カレンツ、グズベリー等の果樹の生育が行われた。また開墾地の跡地は日本初の農業試験場である七重官園となり、ダン (Edwin Dun 1848-1931) も同園で指導にあたった。北海道にお

(5) 牧野信之助「所謂ガルトネル事件の展望」『社会経済史学』5-9、1935年；函館市編『函館市史』1974~2002年；A・H・バウマン「R.ゲルトナーの日記」『地域史研究 はこだて』25、1997年；同「19世紀における北海道植民地化計画—3人のドイツ人の試案に関する比較研究—」『日独文化交流史研究』7、2004年；同「日本国土が狙われる (第1部) 駐日領事ブラントの蝦夷地 (北海道) 植民地化の概略とそれにかかわったゲルトナー兄弟の出自」『国際関係研究』32-1、2011年；富樫倫太郎『箱館売ります—幕末ガルトネル事件異聞—』実業之日本社、2004年；田辺安一『ブナの森が語り伝えること—プロシア人R・ガルトネル七重村開墾顛末記—』北海道出版企画センター、2010年；箱石大「戊辰戦争とプロイセン」(日独交流史編集委員会編、前掲書所収)、39~45頁；Max v. Brandt, *33 Jahre in Ostasien: Erinnerungen eines deutschen Diplomaten*, Leipzig 1901；Klaus H. Wachtmann, *Familienchronik des Pfarrers Friedrich Seybert (1865-1955): Vorfahren der Generation XI-XX*, Nordstedt 2015, S. 36.

(6) 1マイルはイギリス式では約1.6km、ドイツ式では7.5km。ドイツ人商人リュエデリッツ (Adolf Lüderitz 1834-86) はこの相違を利用して、現地の交渉相手が想定していた以上の土地を獲得した。

ける農業の出発点の一つとなったゲルトナーの開墾地には、現在は、樹齢100年を超える「ガルトネル・ブナ保護林」が残されている。

(2) 敗者たちの北海道⁽⁷⁾

北海道大学キャンパスの南側、函館本線の高架との間の窪地に和洋折衷の木造建築、清華亭が建っている。この辺りは1871年に開園した札幌最古の公園、偕楽園があったところで、さらに遡ればアイヌ語で「ヌフ・サム・メム」と呼ばれる湧水池だった。清華亭は明治天皇の北海道巡幸の際の休憩所として1881年に建設され、その後は料亭や貸家として使用されたこともある。説明書きに「ルイス・ボーマー」と記された清華亭庭園の設計者は、アメリカ合衆国から招かれたお雇い外国人だが、生地はハノーファー王国のリュネブルクで、ドイツ風の「ベーマー」が本名の発音に近い。また、「ドイツ系アメリカ人」とされるが、滞米期間は二十代の4、5年間であり、人生の半分をドイツで、残りの半分弱を日本で過ごしている。

17歳でヴェルニゲローデ伯爵家の宮廷造園所で庭師の修行を始めたベーマー (Louis Böhmer 1843-96) は、ツェレ、リュベックの養樹園で働いた後、ハノーファーの王室造園所に雇用され、最初はリンデン王立家庭菜園、次いでヘレンハウゼン王宮庭園に勤務した。1867年、アメリカに渡る。その理由について、普墮戦争の戦禍からの逃避という説明が散見されるが、普墮戦争は1866年の出来事で、またハノーファー王国の戦闘は6月15～29日で終わっており、王宮庭園のあった首都は早々に防衛軍が退却して、さしたる戦闘もなくプロイセン軍に占領されている。ベーマー渡米の理由はむしろ、戦後の1866年9月にハノーファー王国がプロイセンに併合されて消滅し、王宮庭園も暫く放置されたためではないか。なお、ハノーファー国王ゲオルク五世 (Georg V. 1819-78) は国外に逃れて王家復興を模索したが、これに呼応した義勇兵集団「ヴェルフェン軍団」は1400人に達し、1869年にはハノーファー党が結党された。さらに、同国出身で帝国政治に爪痕を残したベニヒセン (Rudolf v. Bennigsen 1824-1902)、ミーケル (Johannes v. Miquel 1829-1901)、ヴィントホルスト (Ludwig Windthorst 1812-91) を「今の我が国の三賢人」と評する声もあった⁽⁸⁾。ドイツ統一の過程で故国を喪失した人びとの集合体験、人的ネットワーク、そして彼らの技術や知識の世界的な広がりはまだ十分に論じられていない。

ニュージャージー、フロリダを経て、ドイツ移民の園芸家エルヴァンガー (George Ellwanger 1816-1906) が経営するロチェスターのマウント・ホープ・ナーセリーで働いていたベーマーは、開拓顧問ケプロン (Horace Capron 1804-85) の要請で1872年1月25日に開拓使に出仕し、3月に来日、最初は青山の東京官園で農業の指導にあたった。この時彼の指導を受けた者には、元会津藩士中田常太郎 (生没年不詳) のように、戊辰戦争で敗れ、「逆賊」の汚名を着せられた者も多かった。後の1879年、余市に入植した旧会津藩士の赤羽源八 (生没年不詳) と、やはり会津藩出身でベーマーに学んだ金子安蔵 (1850?-?) が、それぞれ「緋の衣」と「国光」の品種名で呼ばれるようになるリンゴの結実に成功したが、前者の品種名は、孝明天皇 (1831-67) が会津藩主松平容保 (1836-93) に与えた「緋の御衣」にちなむと言われる。

ベーマーは1874年に短期間、北海道で植物調査や農業指導にあたる。この時に平取のアイヌ集落周辺で野生のホップを発見したことが北海道のビール製造の開始に貢献したとする説もある。1876年に本格的に札幌官園に移り、リンゴや葡萄をはじめ、玉葱、ジャガイモ、大麦、小麦、大豆、小豆、煙草、梨、梅、桃、グズベリーの試作・栽培に携わったかわら、本格的な洋風温室 (後に北大植物園に移築)、清華亭や豊平館の庭園

(7) 中尾真弓「あるお雇い外国人・園芸家の足跡」『横浜植物会年報』19～22・24・26、1990～93・95・97年；George Windell, *The Catholics and German Unity, 1866-1871*, Minneapolis 1954；H. H. Leonhardt, *Bismarck und Hannover- Vorspiel und Nachspiel zur Krisis des Jahres 1866*, Hannover 1959；Helmut Maatz, *Bismarck und Hannover 1866-1898*, Hildesheim 1970；Stewart A. Stehlin, *Bismarck and the Guelph Problem 1866-1890: A Study in Particularist Opposition to National Unity*, Den Haag 1973；Horst Bredekamp, *Leibniz und die Revolution der Gartenkunst*, Berlin 2012 (原研二訳『ライプニッツと造園革命—ヘレンハウゼン、ヴェルサイユと葉っぱの哲学—』産業図書、2014年)；余市町のホームページ。(https://www.town.yoichi.hokkaido.jp/machi/yoichistory/2005/sono17.html、2020年5月26日閲覧)。

(8) プロイセンの穏健自由派の政治家、フィンケ (Georg v. Vincke 1811-75) による評価。J・スタインバーク、小原淳訳『ビスマルク』白水社、2013年、下巻37頁。

の設計も行った。

1882年、開拓使廃止によって10年3か月の契約期間を終了した彼は、横浜にペーマー商会を創業し、西洋花卉の輸入と日本の植物・盆栽の輸出で財を成した。1889年の大日本帝国憲法発布式に際して宴の会場を飾ったのは、ペーマー商会の花々である。

晩年に体調を崩したペーマーは会社を共同経営者ウンガー (Alfred Unger 1865-1938) に譲って1894年10月に離日し、2年後に療養先のブランケンブルクで他界した。同地が属するブラウンシュヴァイクは当時、ゲオルク五世の長男エルンスト・アウグスト (Ernst August von Hannover 1845-1923) が公位継承権を主張してなお係争中であった。普墮戦争と統一から一世代を経て、ドイツ帝国が世界強国への途を邁進していたさなか、敗者の闘争が続いていたことを看過できない。

(3) 二人のハーバー⁽⁹⁾

1874年8月11日午後6時頃、函館八幡宮裏山道を招魂場 (現護国神社) に向かって散歩中のドイツ人男性が、旧秋田藩士の田崎秀親 (1851?-74) に襲撃され、20数か所を刺され死亡した。被害者のルートヴィヒ・ハーバー (Ludwig Haber 1843-74) はシュレージエンのブリーク (現在はポーランドのブジェク) 出身のユダヤ人実業家である。毛皮や木材、農産物を扱う商人の家に三男として生まれ、学校を出ると自身も商業の道に進み、1871年からはロンドン等で活動し、ギリシャ、エジプト、インド、スリランカ、オランダ領東インド、中国を周った後、1873年来日、翌年2月にドイツ代弁領事に任命された。なお、長兄のエドゥアルト (Eduard Haber 1837-?) も海外で商売を営み、1870年代にエルサルバドルの副領事を務めている。また、弟のユリウス (Julius Haber 1844-1920) は法律家として名を成した。

犯行が田崎の単独によるものであり、ドイツ側が強硬な姿勢をとらなかったため、事件は外交問題に発展せずに済んだ。事件の翌日、イギリス人商人・博物学者のブレイキストン (Thomas W. Blakiston 1832-91) らによって遺体は外国人墓地に埋葬され、遺族には1万400ターラーが遺産として残された。他方、下手人は9月26日午前10時に囚獄構内で各国領事の立会いのもと処刑された。

それから50年後の1924年11月8日、慰霊碑除幕式が開かれ、函館外人墓地にあった故人の墓が遭難記念碑として函館公園近くの凶行現場に移された。費用を提供した星製菓の創業者、星一 (1873-1951) や、1927年に日独通商航海条約締結を実現した駐日ドイツ大使ゾルフ (Wilhelm H. Solf 1862-1936) とともに式典に参加したのが、1918年にノーベル賞を受賞した化学者フリッツ・ハーバー (Fritz Haber 1868-1934) である。「化学兵器の父」として有名なフリッツは、ルートヴィヒの甥にあたる⁽¹⁰⁾。

第一次世界大戦中に利益をあげた星は、後藤新平 (1857-1929) から敗戦国ドイツの窮状を聞き、1920年以来、ドイツの学術振興のための寄付を続けた。この寄付金をもとに設置した「星基金」からは、3人のノーベル賞受賞者が生まれている。1922年、星はドイツ政府に国賓待遇で招かれ、カイザー・ヴィルヘルム物理化学研究所 (現フリッツ・ハーバー研究所) 初代所長のハーバーと会ってまたも400万マルクを寄付し、2年後にエーベルト大統領の特使としてハーバーが訪日する契機をつくった。

(9) 星新一『努力と信念の世界人星一評伝』共和書房、1949年；阿部たつを「ハーバー領事殺害事件—秋田藩士田崎秀親のこと—」『叢園』96、1976年；オットー・ハーン、山崎和夫訳『オットー・ハーン自伝』みすず書房、1977年；中山勝「明治7年・函館におけるドイツ領事殺害事件に関する一考察」(手塚豊編著『近代日本史の新研究2』北樹出版、1983年所収)；山朝江、三澤美和「ドイツ領事ハーバーと星一」『薬史学雑誌』41-2、2006年；宮田親平『毒ガス開発の父ハーバー 愛国心を裏切られた科学者』朝日新聞社、2007年；函館日独協会編『ルードヴィヒ・ハーバー資料集—ハーバー遭難記念碑が語るもの—』函館日独協会、2008年；山本明夫「フリッツ・ハーバーとその時代 (第1回) ハーバーの栄光と悲劇」『化学史研究』35-3、2008年；ツァール・カール、村上直己訳「駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ゾルフ」『熊本学園大学論集・総合科学』18-1、2011・12年；佐藤正弥「フリッツ・ハーバー博士と日本—駐日ドイツ大使ゾルフと共に日独学術・文化交流に遺した足跡—」(前編・後編)『化学史研究』45-1、2018年；Dietrich Stoltzenberg, *Fritz Haber: Chemiker, Nobelpreisträger, Deutscher, Jude*, Weinheim 1998；Margit Szöllösi-Janze, *Fritz Haber 1868-1934: Eine Biographie*, München 1998；Fritz Stern, *Fünf Deutschland und ein Leben: Erinnerungen*, München 2007。

(10) 次兄ジークフリート (Siegfried Haber 1841-1920) の息子。

ハーバーの来日期間は10月30日～12月21日の二か月弱だが、それに合わせて開かれた星製菓商業学校大講堂竣工式典は、ハーバー、星、後藤、ゾルフ、長井長義（1845-1929）らをはじめ政官財学の3000人が参加し、盛大を極めた。そして、日本滞在中にハーバーと後藤、ゾルフらが協議したことで、ベルリンに日本研究所（1926）、東京に日独文化協会（1927）が設置される運びとなった。ここに始まる日独学術交流は、ベルリン日独センター（1987）、ドイツ・日本研究所（1988）へと受け継がれていく。

ルートヴィヒ・ハーバーの悲劇は、日独が明治期の師弟関係、そして第一次大戦における敵対関係を脱して、文化・学術面でのパートナー関係を構築するなかで、友好のシンボルへと転じていった。しかし、よく知られるように、ハーバーはナチ期に絶滅収容所で使用された毒ガス、ツィクロンBの開発者であり、星一の息子である新一（1926-97）によれば、ハーバーは来日中、陸海軍の技術者を相手に一週間、毒ガスと空中窒素に関する講義を行っている。さらに、ハーバーと長年親交があり、星基金の委員を務めるだけでなく、自らも星の寄付に助けられてノーベル賞を得たハーン（Otto Hahn 1879-1968）による原子核分裂の発見は、広島と長崎、そして星の故郷の福島が被った甚大な被害へと繋がってしまう。日独の「友好」の歴史を、平和や発展の美名によってのみ語ることはできない。

(4) 甘さと権力の辺境史⁽¹⁾

1869年7月の開拓使設置により本格化した北海道開拓は、粗放栽培や無肥料経営の結果、1920年代初頭には地力回復という課題を抱えるようになり、また従来のアメリカに範をとった大農経営が行き詰まり、ヨーロッパ式の中農経営の導入、具体的には集約作物である甜菜の栽培拡大や有畜農業に改善策を見出そうとしていた。1923年、北海道庁はデンマーク人農家のラーセン家とフェンガー家、そしてプロイセン州マクデブルク近郊のクライン・ヴァンツレーベン製糖会社の農場で働くドイツ人のコッホ家とグラバウ家を招き、模範経営を行わせることとした。デンマーク人農家はそれぞれ札幌郊外の真駒内種畜場と琴似・北海道農事試験場で農業経営に従事し、ドイツ人のコッホ（Friedrich Koch 1880?-?）一家6名は人舞村（現在の清水町）、グラバウ（Wilhelm Grabau 1892?-?）一家4名は帯広で、製糖会社から提供された農場で暮らしながら甜菜栽培に着手する。地力に乏しく水利も悪い土地で、コッホは1930年まで、グラバウは1928年まで農業を実践し、北海道における中農経営の定着という目標こそ果たせなかったものの、甜菜の収穫量の向上、新型農具の普及、日本人によるクライン・ヴァンツレーベンへの研修の活発化等に貢献した。

北海道における甜菜栽培は、1871年の北海道開拓使札幌官園での試作に始まる。1879年に日本初の官営製糖所が紋鼈に建設され、1883年にドイツ式の機械を導入し、ドイツ人技師を短期間招聘している。1888年には札幌製糖会社が創設されたが、いずれも生産が安定せず、それぞれ1896年、1901年に終業に至った。しかし、第一次大戦によって国際的な砂糖不足が生じると、台湾で活動していた帝国製糖株式会社が帯広に北海道製糖株式会社（1919）、十勝清水に日本甜菜精糖株式会社（1920）を設立し、北海道の製糖業が再開された。1923～25年には専用鉄道として十勝鉄道と河西鉄道が敷設され、これと同時期にコッホとグラバウの来日となる。

ここから窺えるように、日本の製糖業は国土開発、そして植民地経営の歴史の一部を成しているが、そのことは甜菜糖業発祥の国、プロイセンにも当てはまる。甜菜糖業の歴史は、プロイセンの化学者マルクグラフ（Andreas S. Marggraf 1709-82）が1745年に飼料用の甜菜から砂糖を分離することに成功し、弟子のアシャー

(1) 佐保吉一「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察—エミール・フェンガーの書簡を中心に—」前・後、『北海道東海大学紀要 芸術工学部』26、2006年、『東海大学国際化学部紀要』5、2012年；「北海道庁が招聘した北欧の外人模範農家」北海道マサチューセッツ協会『HOMAS』54、2008年7月；石井聡「北海道農業史におけるドイツ人招聘農家の意味」『札幌大学総合研究』1、2010年；Michael Engel, Marggraf, Andreas Sigismund, in: *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 16, Berlin 1990；Hubert Olbrich, *Schlesien in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts unter Berücksichtigung der Bedeutung für Franz Carl Achard*, Düsseldorf 1998；Wilhelm Stieda, *Franz Karl Achard und die Frühzeit der deutschen Zuckerindustrie*, Leipzig 1928；Hans-Heinrich Müller et al., *Franz Carl Achard, 1753–1821*, Berlin 2002；Jürgen Wilke, „In Berlin ist es nichts Ungewöhnliches ...“: Heirat und Leben in Lebensgemeinschaft Ende des 18. Jahrhunderts-eine Fallstudie, in: *Historical Social Research*, 28-3, 2003.

ル (Franz K. Achard 1753-1821) がさらに改良を重ねて 1801 年に最初の製糖工場をシュレージエンのクナーン (現在はポーランドのコナリ) に創設したことに始まる。アシャルは砂糖の他にもタバコ栽培や腕木通信の実用化に功績を残した科学者だが、フリードリヒ二世 (Friedrich II. 1712-86) やフリードリヒ・ヴィルヘルム二世 (Friedrich Wilhelm II. 1744-97) は彼を重用し、多額の資金を援助した。サトウキビやタバコを産する海外植民地をもたず、国土の整備も不十分だったプロイセンの歴代の君主にとって、自国の富国強兵は急務であった。植民地と奴隷労働力を必要としない、化学的な技術開発による甜菜製糖の実現は、「持たざる国」ゆえの苦心の賜物だったと言えよう。現在でも、ドイツは甜菜生産において世界第 4 位の地位を占める (2018 年)。砂糖生産に用いられる原材料として甜菜の割合は世界的に低下傾向にあるが、バイオエタノールやバイオガスの原料として近年注目されており、その化学的な利用価値は失われていない。

翻って日本の場合、甜菜栽培に適した北方とサトウキビ栽培が可能な南方をともに掌中に収めていた点でドイツとの相違はあるが、糖業と国策の密接な関係は同様である。1944 年、軍の命令によって、十勝清水の工場は砂糖製造から航空燃料用のブタノール工場に転換されることとなったが、終戦によって実行を免れた。その後も紆余曲折を経て、現在は清水町と帯広市に隣接する芽室町で、日本最大の日本甜菜製糖芽室製糖所が操業している。有名製菓メーカーも多い帯広、北海道の糖業史は抑揚に富む。

(5) 幼稚園と革命⁽¹²⁾

2017 年に十勝管内の建造物として初めて重要文化財に指定された旧双葉幼稚園園舎は、1922 年に二代目園長の臼田梅 (?-1958) の考案に基づいて建築された木造園舎である。正方形の園舎の中央にドーム屋根を戴く八角形の遊戯室を設け、その四方に保育室を配した独特の構造は、ドイツの教育者フレーベル (Friedrich W. A. Fröbel 1782-1852) の考案した「恩物」を意識しており、建築史上の価値とともに、教育史の観点からも独創性が認められよう。

日本での幼稚園教育は 1876 年に設立された東京女子師範学校附属幼稚園から始まるが、関信三 (1843-80) が初代監事 (園長)、林学者の松野礪 (はざま) (1846-1908) のドイツ人妻、松野クララ (ドイツ名 Clara L. Zitelmann 1853-1941) が主席保姆の任に就き、開園当初からフレーベル教育を導入した。日本人男性とドイツ人女性の国際結婚第一号であるクララは音楽教育にも功績を残し、幼少期の巖谷小波 (1870-1933) にドイツ語の個人指導を授けてもいる。クララのもとで保姆を務めた豊田英雄 (1845-1941) は藤田東湖 (1806-55) の姪で、鹿児島女子師範学校附属幼稚園を開園し (1879)、栃木・茨城の女子教育にも貢献した。帯広開拓から四半世紀余りの 1911 年に開園した双葉幼稚園は、彼女たちの取り組みが日本各地で花開いたことの一証左である。

近代日本の幼児教育に大きな影響を与えたフレーベルは、1782 年 4 月 21 日、テューリンゲンのオーバーヴァイスバッハで牧師の 6 番目の末子として生誕した。生後 1 年足らずで母が死去し、不遇な幼少期を過ごした彼は、職を転々とした後、1805 年にフランクフルトの「ペスタロッツ式模範学校」の教師となった。1813 年の解放戦争の際にはリュツォー義勇軍に入隊し、1816 年 11 月 13 日、アルンシュタット近郊の小村グリースハイムの牧師館で「一般ドイツ教育施設」を開設して、独自の教育活動を開始した。なお、この年に引き取った長兄の遺児ユリウス (Julius Fröbel 1805-93) は、1848/49 年革命期に民主派のリーダーとして活躍したことで知られる。フレーベルはカイルハウ、スイスのヴァルテンゼーやヴィリザウ、ブルクドルフ、テューリンゲンのバート・ブランケンブルク等での試行錯誤の末、1840 年 6 月 28 日、印刷術発明 400 周年を記念するゲーテンベルク祭に合わせて、ドイツ初の幼稚園の設立を宣言し、かくしてフレーベル式幼児教育が誕生した⁽¹³⁾。

(12) 武智ゆり「日本初の幼稚園保姆 豊田英雄—女子教育機関で後進の育成も—」『近代日本の創造史』7、2009 年；小林富士雄『松野礪と松野クララ—明治のロマン 林学・幼稚園教育事始め—』大空社、2010 年；原田朋香「松野クララの経歴—先行研究の整理に基づいて—」『武庫川女子大学大学院教育学研究論集』5、2010 年；小原淳「ナッハメルツの革命家群像」『ゲシヒテ』7、2014 年。

(13) ブランケンブルクでの活動を始めた 1837 年を幼稚園設立の年とする見解もある。

ここで無視できないのが、身分差や経済格差、宗派、男女差を超越した平等教育の実現を目指し、幼児に従順と秩序の代わりに創造性を求め、女性に社会進出の機会をもたらしとするフレーベルの理念と活動が、当時のドイツにおいて、必然的に一つの変革の要求とならざるを得なかったという点である。1848年に革命が勃発すると、ザクセン=マイニンゲン、ザクセン=コーブルク、ザクセンの民衆学校教師たちが幼稚園の公教育化、女性保育士の育成、幼稚園教育から高等教育までの体系的な制度化等を求める運動を展開し、フレーベルはその旗頭となる。この運動は自由プロテスタント運動とも結びついて拡大し、無神論者を育て「社会主義的システム」を作り出す危険思想と見なされて、1851年8月7日にプロイセン政府の禁令の対象となった。

フレーベル幼稚園がプロイセンで再開を許されるのは1860年のことだが、彼の理念は「挫折せる革命」の参加者たちによってドイツ内外に広がった。例えば、ユダヤ人解放運動や「ドイツ平和協会」の指導者でもあるリナ・モルゲンシュテルン (Lina Morgenstern 1830-1909) は国民議会議員レット (Wilhelm Adolf Lette 1799-1868) とともに1859年に「ベルリン・フレーベル式幼稚園促進女性協会」を設立した。また、ハンブルクの工場主の娘で革命期の女性運動を率いたベルタ・ロンゲ (Bertha Ronge 1818-63) はロンドン (1851)、マンチェスター (1859)、リーズ (1860) にフレーベル幼稚園を創設し、その妹のマルガレーテ・シュルツ (Margarethe Meyer-Schurz 1833-76) は1854年にウィスコンシン州ウォータータウンにアメリカ初の幼稚園を設立した。姉妹はともに1848年の革命家を夫にもち、マルガレーテの夫のカール (Carl Schurz 1829-1906) はアメリカ合衆国内務長官を務めた人物である。さらに1859年にボストンで幼稚園を設立したドゥエイ (Adolph Douai 1819-88) も革命家で、1848年当時からフレーベルの信奉者であった。革命から10年以上を経てなおフレーベル教育を禁止し続けたプロイセン当局は、幼稚園教育の社会的な影響、そして変革運動との絡み合いを正しく理解していたと言うべきであろう。

(6) 異榻同夢の協和思想¹⁴⁾

函館の老舗ハム・ソーセージ店の創業者で「胃袋の宣教師」と呼ばれるカール・ヴァイデル=レイモン (Carl Weidl-Raymon 1894-1987) は、ハプスブルク帝国のカールスバート (現在はチェコのカルロヴィ・ヴァリ) で、代々食肉業を営む一家に生まれた。カールスバートは登別カルルス温泉の名称の由来ともなった温泉地である。1912年に食肉加工マイスターの称号を獲得し、欧米各地でさらなる研鑽を積んだ後、1919年に帰国の途で立ち寄った日本で東洋缶詰の技術指導を引き受けることになり、翌年、同社の支社があった函館に渡る。1922年に日本人女性と駆け落ちし、第一次世界大戦後にチェコスロヴァキアに編入された故郷に帰り、開いた店も繁盛していたというが、2年後に再び函館に戻る。函館駅前に開業し、ハムやソーセージを食べる習慣が一般化していなかった日本への「宣教」を粘り強く続けた結果、1933年には、牛35頭、豚310頭、羊30頭を飼育する牧場を備えた大野町新工場の建設が実現した。しかし1938年、北海道庁から事業禁止と工場売却の命令が出され、終戦まで苦しい境遇を強いられる。1948年にようやく仕事の再開がかない、80歳を迎えた1974年、長年の功績を認められて、西ドイツ大統領から「功労勲章十字章」が贈られた。

食文化の領域で足跡を残したレイモンは、汎ヨーロッパ主義の信奉者でもあった。ハプスブルク貴族と日本人女性の青山みつ (1874-1841) を両親にもつクーデンホーフ=カレルギー (Richard Nikolaus Eijiro Coudenhove-Kalergi 1894-1972) がこの運動を最初に提唱したのは、1922年秋のことである。世界大戦によるヨーロッパの荒廃とハプスブルク帝国の崩壊、戦後の民族紛争を経験した彼は、ヨーロッパの連帯、そしてその延長線

14) シュミット村木真寿美『レイモンさんのハムはボヘミアの味』河出書房新社、2000年；川嶋康男『大きな手大きな愛—“胃袋の宣教師” 函館カール・レイモン物語—』農山漁村文化協会、2008年；平川均『鹿島守之助とパン・アジア論への一試論』関口グローバル研究会、2011年；植松三十里『レイモンさん—函館ソーセージマイスター—』集英社、2020年；Vanessa Conze, Richard Coudenhove-Kalergi: *umstrittener Visionär Europas*, Gleichen/Zürich 2004；Anita Ziegerhofer-Prettenthaler, *Botschafter Europas. Richard Nikolaus Coudenhove-Kalergi und die Paneuropa-Bewegung in den zwanziger und dreißiger Jahren*, Wien 2004；Ulrich Wyrwa, Richard Nikolaus Graf Coudenhove-Kalergi (1894-1972) und die Paneuropa-Bewegung in den zwanziger Jahren, in: *Historische Zeitschrift*, 283, Hf. 1, 2006, S. 103-122；Flags of the Worldのホームページ (http://fotw.fivestarflags.com/eu_cce.html, 2020年5月26日閲覧)。

上としての世界平和を呼びかけ、当初はほとんど賛同者を得られなかったものの、著書『汎ヨーロッパ』(1923)が大きな反響を呼び、1926年には24か国の代表を集めた第一回汎ヨーロッパ会議がウィーンで開催された。レイモンがこの思想に最初に触れたのは、カールスバートに帰郷していた時期である。再び函館に戻ってからも、レイモンは事業のかたわら汎ヨーロッパ主義への応援を続けた。函館の空に輝く北極星をイメージして彼が考案した、青地に黄色い星一つをあしらった旗は、採用には至らなかったものの、現在の欧州旗と酷似している。

レイモンの旗が象徴するように、汎ヨーロッパ主義は後のEU統合へと繋がっていくが、その思想を「平和」と「友愛」の理想にのみ収斂させることはできない。ヨーロッパ・ブロックを含めた5つのブロックに世界を分け、それらの協調による世界連邦を形成しようと構想したクーデンホーフは、しかし植民地支配に対して容認的であった。また、ヒトラーと鋭く対立した反面で、ムッソリーニ (Benito A. A. Mussolini 1883-1945) やドルフス (Engelbert Dollfuß 1892-1934) のファシズムには好意的であった。自らの思想に心酔する鹿島守之助 (1896-1975) に「汎アジア」の確立を提言したのもクーデンホーフであり、その後の鹿島は大東亜共栄圏の思想に傾いていく。なお、鹿島は第一次岸内閣の時に北海道開発庁長官を務めてもいる。

レイモンに話を戻す。彼は1925年、31年に北海道庁に意見書を提出し、畜産業をつうじた北海道開発というビジョンを提示し、北海道には採用されなかったが、関東軍と南満州鉄道会社の注目を引くこととなる。1935~37年、満州における畜産業振興を依頼されたレイモンは、自らの北海道開発構想をベースに満州に10か所の畜産試験場を開設し、さらに台湾、朝鮮でも指導にあたった。彼が名乗った「礼門」という日本名は、松岡洋右 (1880-1946) から授けられたものだという。レイモンにとって、5つのブロックから成る世界平和の理想と、五族協和の夢は無関係であったのか。この問題は、性急な善悪二元論を超えた立場からの検討を要する。

(7) クサヴェラ・レーメ⁽¹⁵⁾

北海道を中心に8つの学校を経営する藤学園の設置母体は、オスナブリュックの北西50キロ、蘭独国境に程近い小邑テュイネの「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」である。同修道会はシスター・アンゼルマ (Anselma Bopp 1835-87) のもと1869年11月に11名で活動を開始したが、ビスマルクの文化闘争による迫害を乗り越え、創立者が他界する頃には11支部、146名の修道女を擁するまでに成長していた。

藤学園の創設と発展に貢献した修道女、クサヴェラ・レーメ (Xavera Rehme 1889-1982) はオスナブリュックのフランシスコ会系ギムナジウムを卒業後、1907年にテュイネの修道会に入った。24歳の時、1907年にフランシスコ会の聖職者として250年ぶりの来日を果たし、札幌で活動していたキノルド (Wenseslaus Kinold 1871-1952) の依頼で、日本での布教活動を決意する。一度は第一次世界大戦に妨害されるも、念願かなって1920年8月18日に2人の同僚とともに札幌に到着した彼女は、経済的な困難を乗り越え、1925年4月1日に藤高等女学校を創設した。同年7月7日、一緒に来日した前任者の急逝に伴い校長に就任、戦前戦後をつうじて女子教育に尽力し、1953年に藤学園旭川高等学校が創立されると同校の初代校長となる。1971年に札幌に戻った後も活動を続け、1982年に93歳で亡くなった。

一方、レーメらを招いてともに藤高等女学校を創設したキノルドは、札幌知牧区の初代教区長となり、

(15) 小池創造『田舎伝道者ピアソン宣教師夫妻』日本基督教会北見教会ピアソン文庫、1967年；北海道総務部人事課編『北海道開発功労賞 受賞に輝く人々』北海道総務部人事課、1972年；北見市史編さん委員会編『北見市史』下巻、北見市、1983年；クサヴェラレーメ追悼集編集委員会編『愛あるところにクサヴェラレーメ追悼集—』クサヴェラレーメ追悼集編集委員会、1984年；角幸博『建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について』『日本建築学会計画系論文集』59-465、1994年；伍井章編『G・E・キュックリッヒの生涯—1998年キュックリッヒ生誕100年記念—』愛の泉、1998年；Reinhild Jetter, *Gertrud Kücklich, Japan-Missionarin der Evangelischen Gemeinschaft: Ein Beitrag zur interkulturellen Bedeutung christlicher Missionsarbeit anhand ihrer Berichte von 1922 bis 1975*, Stuttgart 2002；Marianna Rosenberger, *Kehren sie um! In Thuine gibt es für Sie nichts zu tun. Schwester Anselma Bopp und das Werden der Kongregation der Franziskanerinnen von Thuine 1857-1869*, Osnabrück 2008；フランシスコ会日本聖殉教者管区・札幌修道院のホームページ (<https://www.ofmsapporo.jp/>、2020年5月26日閲覧)；藤女子大学のホームページ (https://www.fujijoshi.ac.jp/koukai/kyomu/student_handbook/2020/pdf/7.pdf、2020年5月26日閲覧)。

1933年に札幌光星商業学校を創設し、1952年5月22日、レーメと同様に祖国ドイツから遠く離れた札幌で帰天した。旧藤高等女学校の校舎の一部を用いて建設されたキノルド資料館は、北星女学校教師館（現北星学園創立百周年記念館）、天使園トラピスチヌ修道院、定山溪のヘルヴェチア・ヒュッテ等を設計したスイス人建築家ヒンダー（Max Hinder 1887-1963）の手になる。

日本で活動した女性宗教家としては、レーメの他に、ドイツ福音教会から派遣されて、埼玉県加須市や東京都墨田区で1922～76年の半世紀以上にわたり活動したキュックリヒ（Gertrud E. Kücklich 1897-1976）がいる。また、夫ともに道内各地で伝道したアイダ・ゲップ・ピアソン（Ida Goepp Pierson 1862-1937）はアメリカ人だが、少女時代をドイツで送っており、有島武郎（1878-1923）にドイツ語を教えている。日独関係史において女性が果たした役割にさらなる光が当てられねばならない。

Ⅲ. おわりに

北海道と外国の交流史においては、ラクスマン（Adam Laksman 1766-1806）の来訪（1792）、プロヴィデンス号の寄港（1796）、ゴロヴニン（Vasilii M. Golovnin 1776-1831）の抑留（1811）といった初期の接触、あるいは箱館戦争でのフランス軍事顧問の活躍、アメリカ人が多数を占めるお雇い外国人の活動等がよく知られる反面、それらと比較すると、ドイツ関連の史実の知名度は決して高くない。しかし、ロシアの極東開発、アメリカの西漸とアジア進出、西欧の植民地拡大、そして日本の近代国家建設の各ベクトルが交錯する場所であった北海道の歴史が、プロイセンによる植民地化の可能性を孕んでいたこと、あるいはペーマー、コッホ、グラバウ、レイモンといった技術者がそれぞれの分野で実を結んだこと、ハーバー殺害の悲劇が日独友好の拠りどころとなっていったこと、フレール幼稚園やレーメの女子教育が北海道の人材育成に貢献したこと等を確認した時、ドイツから北海道を捉え直すことには、従来の北海道史、さらには日本史研究の不足を多少なりとも補う意味があろう。またドイツ史研究にとっても、北海道で活動したドイツ人たちの事績を再検証することは、トランスナショナルな歴史研究の活性化というメリットがある。

北海道の場合、19世紀後半になって開発が本格化し、西洋各国の参入が活発化したため、とくに近現代史に関して、外国との交流をものがたる事例が豊富であることが一つの地域的特性となっている。しかし日独交流史の細部への考究を続けることの有効性は、北海道以外の地域についても確認できる。今後、他地域に関する検討を進める。

史跡一覧

史 跡 名	住 所	備 考
ガルトネル・ブナ森	亀田郡七飯町字桜町	Ⅱ(1)に関連。
七重官園跡地	亀田郡七飯町本町 6-2-11 七飯町立七重小学校	Ⅱ(1)に関連。
七飯町歴史館	亀田郡七飯町本町 6-1-3	Ⅱ(1)に関連。
五稜郭のクルップ砲	函館市五稜郭町 44	Ⅱ(1)に関連。維新軍の軍艦「朝陽」の大砲 1860年製・クルップ砲、1866年製・英オードナンス社ブラッケーリー砲の展示。
開陽丸記念館	檜山郡江差町字姥神町 1-10	Ⅱ(1)に関連。旧幕府軍の開陽丸に装備されていたクルップ砲の展示。
市立函館博物館	函館市青柳町 17-1	Ⅱ(1)に関連。
榎本公園	江別市工栄町	Ⅱ(1)に関連。榎本武揚像は、他に東京都墨田区梅若公園、東京農大世田谷キャンパス、小樽市龍宮神社、五稜郭アトリウム、函館市梁川公園等にある。

北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討

史跡名	住所	備考
旧赤松家記念館	静岡県磐田市見付 3884-10	II (1)に関連。赤松則良 (1841-1920) は榎本らと洋行 (1863-68)、デンマーク戦争を観戦、エッセンのクルップ (Alfred Krupp 1812-87) を訪問 (1864)。
清華亭	札幌市北区北 7 西 7	II (2)に関連。
豊平館	札幌市中央区中島公園 1-20	II (2)に関連。
エドウィン・ダン記念館、真駒内用水	札幌市南区真駒内泉町 1	II (2)に関連。
北海道大学農学部植物園	札幌市中央区北 3 西 9	II (2)に関連。
ペーマー設計の温室跡の銘版	札幌市中央区北 3 西 1-1-1 札幌ブリックキューブ 1F	II (2)に関連。
ルイス・ペーマー顕彰モニュメント「透明りんご」	余市郡余市町登町 1102-5 山本観光果樹園	II (2)に関連。
会津総合運動公園「日本最初のりんごの原木」の記念樹	福島県会津若松市門田町大字御山字 村上 164	II (2)に関連。余市産の「緋の衣」の原木。
ハーバー遭難記念碑	函館市青柳町 17 函館公園内	II (3)に関連。市立函館博物館と同一敷地内に移転。
函館外人墓地	函館市船見町 23	II (3)に関連。ドイツ人七名の墓がある。
星薬科大学歴史資料館	東京都品川区荏原 2-4-41	II (3)に関連。
明治大学平和教育登戸研究所資料館	神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1	II (3)に関連。旧登戸研究所の跡地。
大久野島毒ガス資料館	広島県竹原市忠海町大久野島 5491	II (3)に関連。旧日本軍の毒ガス関連施設としては、他に東京都板橋区の陸軍板橋火薬製造所跡深谷市の深谷製造所、神奈川県寒川町の相模海軍工廠、北九州市曾根駐屯地内の曾根製造所等。
コッホの旧住宅	上川郡清水町下佐幌基線 70	II (4)に関連。
ビート資料館	帯広市稲田町南 8 線西 14	II (4)に関連。日本甜菜製糖株式会社帯広製糖所跡地
八雲町の三澤牧場	二海郡八雲町立岩 2	II (4)に関連。コッホ家の次女の嫁ぎ先。北海道最古のレンガサイロ (1921) を保有。
ラーセン農場跡地	札幌市南区真駒内緑町 3 真駒内五輪記念公園	II (4)に関連。
北海道糖業道南製糖所 (旧紋籠製糖所)	伊達市館山下町 1	II (4)に関連。日本初の官営甜菜製糖工場 (1870)。敷地入口に台湾から返還された日本最古の製糖機械を保存。
フェンガー記念館	山形県新庄市大字松本 370 県立新庄神室産業高等学校	II (4)に関連。フェンガーは山形や静岡でも指導にあたった。
旧双葉幼稚園園舎	北海道帯広市東 4 南 10	II (5)に関連。
土浦市立土浦幼稚園跡	茨城県土浦市大手町 13-32 土浦小学校	II (5)に関連。フレーベルの恩物等は土浦市立博物館で保管、展示。
関信三の墓	東京都台東区谷中 1-7-31 宗禅寺	II (5)に関連。フレーベルの恩物を模した墓石。
青山霊園の松野クララの顕彰碑	東京都港区南青山 2-32-2	II (5)に関連。

史 跡 名	住 所	備 考
お茶の水女子大学歴史資料館	東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学本館 1 階	II (5) に関連。2016 年 1 月 19-31 日に「附属幼稚園創立 140 周年記念特別展」を開催。
大阪市立愛珠幼稚園	大阪府大阪市中央区今橋 3-1-11	II (5) に関連。重文に指定。
豊田英雄像	茨城県立水戸第二高等学校前	II (5) に関連。
頌栄短期大学 ハウ資料室	兵庫県神戸市東灘区御影山手 1-18-1	II (5) に関連。オープンキャンパスの際に所蔵資料を展示。
東京大学千葉演習林 松野記念林	千葉県君津市折木沢	II (5) に関連。松野クララが夫の磯の功績を記念して植林。
函館カール・レイモン レイモンハウス元町店 レイモン歴史展示館	函館市元町 30-3	II (6) に関連。
函館カール・レイモン 本社工場	函館市鈴蘭丘町 3-92	II (6) に関連。工場見学が可能。
カルルス温泉	登別市カルルス町	II (6) に関連。
クーデンホーフ光子居住地	東京都新宿区納戸町 26	II (6) に関連。
秋恵園の「パン・アジア」の碑	兵庫県たつの市揖保川町新在家 337	II (6) に関連。鹿島守之助の生家の一部。永富家住宅は重文。
藤女子大学キノルド資料館	札幌市北区北 16 西 2-1	II (7) に関連。
旭川藤星高等学校クサヴェラ館 展示コーナー	旭川市花咲町 6-3899	II (7) に関連。
加須市役所のキュックリヒの胸像	埼玉県加須市三俣 2-1-1	II (7) に関連。
カトリック十和田教会	青森県十和田市稲生町 12-24	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
神田カトリック教会	東京都千代田区西神田 1-1-12	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
カトリック松が峰教会	栃木県宇都宮市松が峰 1-1-5	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
北星女学校教師館 (現北星学園創立百周年記念館)	札幌市中央区南 4 西 17-2	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
天使園トラピスチヌ修道院	函館市上湯川町 346	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
定山溪のヘルヴェチア・ヒュッテ	札幌市南区定山溪	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
ピアソン記念館	北見市幸町 7-4-28	II (7) に関連。ヒンダーの設計。
旧ロシア領事館	函館市船見町 17-3	ドイツ人建築家ゼール (Richard Seel 1854-1922)、デ・ラランデ (Georg de Lalande 1872-1914) 設計。
レルヒ中佐像	上川郡東神楽町東 2 線 13 号	日本に初めてスキーを伝えたオーストリア軍人レルヒ (Theodor E. v. Lerch 1869-1945) に関連。
北鎮記念館	旭川市春光町 国有無番地	レルヒに関連。
北海道スキー発祥之地碑	旭川市字近文 6 線	レルヒに関連。
レルヒ記念公園	虻田郡倶知安町南 11 東 1-34-2 外	レルヒに関連。
サッポロビール博物館	札幌市東区北 7 東 9-1-1	初期のビール製造に関連。
ホップ国内初発見	岩内郡共和町 堀株川流域	初期のビール製造に関連。
サッポロビール ホップ園跡地の碑	札幌市豊平区西岡 3-8-13	初期のビール製造に関連。
北大構内のアイヌ納骨堂	札幌市北区北 8 西 5 北大構内	1879 年に札幌近郊の墓から盗掘され、ドイツに持ち出された遺骨が、2018 年に返還された。